

『両度聞書』は読めるか

——《題しらず》説の読解の試みを通して——

武井和人

一、はじめに

勅撰集を『総体』として読み解く方法には、色々な立場があらうと思ふ⁽¹⁾。例へば、構造論・構成論がまづ思ひ浮かぶし、しかもそれが最も効果的かつ正統な方法であり立場である事は否めない事実である。そして、構造論・構成論から我々が得た実りもまた豊かである。然し問題は、では他に有効な方法がないのか、といふ事なのである。そんな事はない筈で、筆者が小論で問題にしようと思ふ《題しらず》をめぐる論議も、(小論が有効たりえたかどうかはひとまづおくとしても)一突破口たりうろと思ふのである。

小論の筆者は、『両度聞書』(常縁伝・宗祇受)の《題しらず》説の読解の試みを、既に三度ばかり発表して来た。それらを発表順に列挙すれば、以下の如くである。

- ①「《題しらず》とは何か・上」「古今和歌集両度聞書」疏——(小論 第3号 昭60・3)

②「『両度聞書』札記——題不知とは何か——」(和歌文学会例会における口頭発表…於二松学舎大学 昭60・7)

③「《題しらず》とは何か・上之補訂——『古今和歌集両度聞書』疏

——」(小論 第4号 昭61・3)

④③の関係を略述すると、以下のやうになる。

当初、『両度聞書』の《題しらず》の解釈、及びその結果我々が当面するであらう諸問題を論ずべく、①を書き始めたのだが、自分自身でも恥づかしい事に、活字として発表して直後から改めて論を整理・発展させる必要が生じ、ために急遽発表したのが②であつた。その内容に基づき、論旨の大幅な手入れは避けつつ①を補訂したので③、といふことになる。結局の所、活字で公にした範囲では、①の内容以上にはいまだ出てゐない。

ところで、②の発表のために、手元の資料を再検討してゐた過程で、自分が本来論じたい、否、論すべき事柄は、『両度聞書』の《題しらず》説にとどまらぬ事に気付いた。その折の感触を過不足なく

言葉で表現する事は難しいのだが、あへていふならば、

〔聞書は読めるか〕

といふ一文に集約出来ると思ふ。更に敷衍するならば、

〔聞書形式の注釈書の解釈の目標は、どのレベルに設定すべきなのか〕

〔聞書形式の注釈書の正しい解釈とは、講釈をした人物の意図の復元にあるのか、あるいはその講釈を聞いた乃至記録した人物の理解を復元にあるのか、あるいはそのいづれでもないのか、いづれでもあるのか〕

〔「両度聞書」の場合、常縁の意図の復元にせよ、宗祇の理解に復元にせよ、果たして現実に、そのやうな復元作業―即ち「両度聞書」の解釈―が可能なのであらうか〕

〔ひいては、聞書形式の注釈書を解釈する方法とは如何、またその可能性は如何〕

とてもならうか。

②の発表の時はまだ、以上の課題を示唆するにとどめ、③でも余り深くは論じなかつたのだが、これらの論はやはり、これらの課題を前面に据ゑて述べられるべき性格のものだつたと考へるやうになつて来たわけである。

そこで小論では、①③を一旦清算し、改めて論を立てることにしたい。いふまでもないことながら、論の骨組み自体は、①③と異なる所はない。特に②で示した論述の方法なり視点は、概ね踏襲したつもりである。しかし、微細な点にわたると、かなりの変貌が

認められると思ふ。その点は予め断つて置きたい。

ついでにもう二点ほど、小論における筆者の立場を明確にしておきたい。

小論は、『両度聞書』における《題しらず》説の正しい解釈を第一の目的とするものではない。その作業を通して、前掲の懸案を明確に対象化する（誤解なきやうに断つておくが、小論は実証の積み重ねによつて、確固たる結論を導き出さうとするものではなく、一種のシミュレーションと考へて頂いた方が、正しいだらうと思ふ）事に主眼がある。従つて、立論の前段階といふべき性格の文章である。

また、『両度聞書』の《作者》を如何に規定するか、これも大問題である。この事を筆者なりにいひ定めぬ限り、論理の曖昧さは免れえまい。饒舌たらん事を忌避せずにいへば、『両度聞書』の《作者》とは、

常縁、あるいは宗祇、あるいは常縁十宗祇

とても表現するべき存在だらうが、これでは余りに煩雑でありかつ余計曖昧になつてしまふ危険性もあるので、これらの意味をすべて含意させて、仮に「宗祇」といふ言葉で象徴させることにする。従つて、ここにいふ「宗祇」とは、歴史上実在したあの宗祇と到底イコールでは結びきれない仮構の存在である。この点も確認しておきたい。

なほいふまでもない事ながら、念の為に断つておけば、小論は、『古今集』における《題しらず》を、貫之ら撰者達がどのやうな意図のもとに「記号化」してゐたか、といふ最も根本の問題には、一

切立ち入らない。理屈の上では、『両度聞書』の《題しらず》説が十全に解釈出来なくても、『古今集』の《題しらず》の理解は可能だし、ゆゑに、原典の理解を第一の目的とする研究者にとつては、小論の如き論述方針は、無用の詮索以外の何物でもないだらう。然し、筆者が見る所、話を『古今集』それ自身に求めた場合、問題の解決はより一層困難の度を強めるだらうと思ふ。近時、中古和歌研究者によるこの問題へのアプローチ②が試みられてゐるが、小論の内容と重なる所は極めて僅少であり、これも行文の中で直接参照する事は避けた。

二、問題の所在とその問題たるゆゑ

『古今集』の詞書で一番初めに見える《題しらず》は、次の箇所である。

題しらず

よみ人しらず

春霞たてるやいづこみ吉野の吉野の山に雪はふりつゝ（春上・

三）

この《題しらず・よみ人しらず》に対しての『両度聞書』の注③は、以下のやうなものである。

題しらず 題しらずといふ事は当座の景氣にのぞみてよめる事

もあり。又、会所の斟酌などによることもあり。又題あれども心あらはれざればいへる事もあり。さだまらぬ事也。
よみ人しらず 或は勅勘の人、あるは貴人、あるは古き世の人、又は実に名をしらねばかけることもあるべし。此歌の作者、口伝あり。これは勅勘の時也。勅勘なれど此三番に入らるゝ事、かつは貫之が名誉、又は直なる義也。

筆者の体験を正直に述べれば、これらの注釈を最初に読んだ時、『よみ人しらず』説の方は、まだ何とか理解出来たが（但し、何故「貫之が名誉」となるのか、直ちには理解出来なかつたけれども④）、《題しらず》の方は全くなのお手上げだつた、とここに正直に告白しておかうと思ふ。更に正確にいへば、通り一遍の通釈は何とか可能だつたが（これとて自信があるものでもないのだが）、これらの言葉に込められてゐる含み、とてもいふべきものが全く掴めなかつたのである。

ついでにここで、小論の基本的立場―といふよりも立論の前提―を明確にしておく。それは、

〔《題しらず》説と《よみ人しらず》説は、あるいはセットで本来考察されるべき関係にあるかもしれぬが、小論では切り離し、《題しらず》説のみを考察の対象とする〕

といふものである。

然し、上掲の三番歌においては、勅勘の人の作だとされてゐるのだから、その場合の《題しらず》とは、当然「人」と無縁ではありえないのである。しかも「勅勘の時也」と詠歌事情がどうやら宗祇

には分明らしく、ならばいよいよ面妖な詞書となつて来るのである。従つて、こと三番歌に関する限り、上掲の立場が、いかに作業仮説であるとはいへ、論のスタートから誤つた方向に向かはせる危険性を孕んでゐたといへるのである。それでもあへて切り離れたゆゑんは、ただでさへ論が不透明かつ不明瞭になる恐れが多分にあるのだから、この上《よみ人しらず》をセットすると、余計混乱の極みに至る恐れがある事、また少なくとも常縁や宗祇においては、この二説が必ずしも一具のものとして理解されてゐなかつたらしい事(5)、などである。この立場を持する事によつて、問題の重要な側面を見落す危険性があるいはあるかもしれないけれども、出来るだけ具体的な考察の中での目配りを以て補つて行くつもりである。さて、上掲の《題しらず》説をあらあながめて、筆者が揭示する疑問点をまづ列挙してみよう。

- ①「当座の景気」とは、具体的に、いかなる事を指してゐるのだらう。
- ②そして、「当座の景気にのぞ」むこと、とは一体何だらう。
- ③「会所」とは何か。
- ④そして、「会所の斟酌」とは何か。
- ⑤そしてまたこの一文は、「会所の斟酌」によつて、《題しらず》といふ設定(?)が決定される、と読みうるだらうか。
- ⑥「題あれども心あらはれざればいへる事もあり」とはいかなる意味か。

⑪この注の場合、常縁の見解と宗祇の見解を区別する事が出来るか。仮に出来たとして、その必要があるか。例へば、
常縁講十宗祇記「題しらずといふ事は……いへる事もあり」
宗祇考「さだまらぬ事也」
と区別するべきとなると、問題は常縁↑宗祇の学説の対立といふ、別の大きな問題に逢着せざるをえなくなる。

筆者の思ひ浮かべうる疑問点は以上の通りだが、更に詳しく検討すれば、これにとどまらないであらう事は想像に難くない。

①②を一度に考察する事は、いたづらに論旨の混乱を招くだけなので、まづ、①②③④あたりに代表される語義の確定から、節を改めて考察を始めてみたい。語義の確定が出来なければ、⑤以下を考察する事など出来ないのは当然だからである。

三、語義の確定

①当座の景気

この二語は分けて考へるより、セットにして考へた方が都合が良

い。
用例を広く蒐集する前に、何よりも『両度聞書』の内部における用例の有無を確認しなければならない。

まづ「当座」だが、気がついた用例は次の二である。

⑦そして、「いへる」の主語は誰か。『古今集』の撰者達かそれとも作者か。

⑧最後の「さだまらぬ事也」の意味は、

(1) A・B・C いづれの場合も想定しうるが、この三番歌においては、そのいづれか、決定出来ない。

(2) A・B・C いづれの場合も想定しうるが、それはあくまでも一般論であつて、実際の事例に当てはめて考へる事は難しい。

(3) A・B・C・D・E……と、《題しらず》を説明しうる見方は色々あるが、そのいづれか決定しがたい。

(4) A・B・C がいづれも「……事もあり」といふ文型をとつてゐるのだから、いづれも真と考へてをり、どれか一つのみを真と断定する事は出来ない。

(5) 「さだまらぬ事也」といふ一種の不可知論が、A・B・C に続く第四の見方である。

のいづれであらうか。

⑨そもそも、三番歌における宗祇の説明の方法は、

〔室町時代の歌会・連歌会、あるいは撰集における実体験〕

↓『古今集』に援用する

〔『古今集』の解釈に、同時代の知識は援用されてゐない〕
のいづれであらうか。

⑩前項を考察する場合、注釈の本文が現在形で一貫して書かれてゐて、明確に過去を表す言葉(き「けり」)が全く用ゐられてゐない事と、結びつけるべきだらうか。

◇秋風にかきなすことの声にさへはかなく人の恋しかるらん(五八六)

秋風の身にしみ物あはれなる折ふし、かならず琴を聞いていとしく人の恋しきよし也。秋風楽の義に非ず。かやうのたぐひ又故事などをよむ事あるに、ことごとく其事をばよまず自然のよそほひ又は当座の事にいにしへをおもひ出よむ也。可意得事にぞ。

◇玉だれのこがめやいづらこよろぎの磯の浪分けおきに出にけり

(八七四)

こと書にくはし。玉だれのこがめやの事、御抄にも風俗の歌にのみならずはしたるとばかりあり。そのいはれ待べきを、当座の歌にたがふ心もあれば、あらはさずとぞ。可受師説。心は、すでに後の御前へいでたれば、それをおきに出にけりといへり。

ここでも語義を確定する事は難しいけれども、辞書類が説く如く、「その場で」「その時に」などといふ意味に解して良いと思ふ。となると、今問題にしてゐる三番歌の「当座」も、「その場」の謂と解して必ずしも間違ひとはいへない事になる。

この事を確認する為に、常縁・宗祇の他の著作、及び彼らの視野にはいつてゐた可能性が頗る高い連歌学書の用例を見てみよう。

〔常縁・東野州聞書・巻三〕 * 日本歌学大系本

◇三井寺へ今度被_レ越ける時よまれける歌、当座に人のほめたる
とてかたられし。

◇氏世の御物語ありしは、当座の時、宜殊に能く侍りしなりと物
語あり。

〔宗祇・初心抄（寛正3年以前）〕 * 岩波文庫本

発句などの事、当座にてさす事候間、さ様の時は不_レ及_レ力発
句をする事（にて候。）それは其時の当座の躰又天氣などを見つ
くろひてする事候。さやうに候へば、当座に出来たる発句と聞
こえて面白く候。

〔宗祇・吾妻問答（文明2年）〕 * 岩波文庫本

◇あまりに人の知らぬを好みてつかふまつれば、初心の人など付
にく_レ候ひて、当座に遅々する事待れば、無興の事も侍るべし。
◇吉き句をいかにもがなとせば、当座奉公かけて失_二面目_一事侍
るべければ…

◇か様に覚悟してだに、当座の儀大事に候。

◇当座のしわざは、はやばやとせよと申し侍りし。

* コノ他「当座」ノ用例多シ。

〔伝宗祇・初学用捨抄〕 * 「中世の文学」本

庭のおもはまだかかぬに夕立の空さりげなくすめる月哉（新
古今・二六七）と頼政の歌（に）詠るにも当座之心なるべし。

* 底本は筑波大学本。諸本多くは「当座」を「当座の景氣」に
作る。

〔宗祇・肖柏・伊勢物語肖聞抄〕 * 文明12年本（?）

こゝをなむ…当座いひたる詞也。（87段）

* 文明9年本（8）モ同文。

〔宗祇・宗長・伊勢物語宗長問書〕 * 片桐洋一氏「伊勢物語の研究
資料編」

春日野のわかむらさきのすり衣、当座春日野なれば也。（1段）

以上の用例を通覧すると、明らかに二つの傾向が見て取れる。即
ち、

《日常語としての当座》《文藝用語としての当座》

の二つである。当然の事ながら、歌学書・連歌学書には後者の用例
が多く、注釈書では専ら前者の意で用ゐられる事が多い。従つて、
先に示した試解「当座」その場（の、で）―は、「両度聞書」が注釈
書であるといふフアクターからめると、《日常語としての当座》であ
る蓋然性がより高い、といふ事になる。

果たして「歌学書・連歌学書には後者の用例が多い」といふ見通
しが、宗祇以前においても成り立つかどうか、実際の用例に当たり
つつ確認してみよう。用例はいづれの資料も抄出である。

〔良基・連理秘抄〕 * 日本古典文学大系（現代語訳も）

◇少々の事は当座の勘能にまかすべし。

（その座に出席している名人・上手の意見に従つておけばよい）

◇只当座の会などに興を催さんためには…

（その席で急に催した会などで）

◇又当座の景氣もげにと覚ゆるやうにすべし。

（その場の景色を詠むにしても、一座の者がなるほどと感心するよう
に作るがよい）

（その席における風景を描くに当たつても、読者がいかにもその実境
を見るかのごとく感じるように句作する） * 能勢朝次「僻連抄評
釈」による。

〔良基・筑波問答〕 * 日本古典文学大系

◇この此のやうに、心をまはし詞をみがきて、当座の興を催すや
うなる事は、翁いまだ聞き侍らざりき。

◇連歌は本より古の模様さだまれる事なれば、たゞ当座の感を
催さんぞ興はあるべき。

〔良基・十問最秘抄〕 * 日本古典文学大系

連歌も一座の興たるあひだ、只当座の面白きを上手とは申すべ
し。いかに秘事がましく申すとも、当座聞きわるからむはいた
づら事なり。

〔良基・新式追加条々・奥書〕 * 岩波文庫本

此式談ニ救済・周阿一作下了。然而未_レ定事済々有_レ之歟。所
詮可_レ仰ニ当座先達意見一者也。末学輩不_レ可_レ有_二異論_一。

摂政〔判〕

〔耕雲口伝〕 * 続群書類従本

抑此当座兼日の両条は。誰も心得ぬへきことなり。

〔梵燈庵返答書〕 * 岩波文庫本

歌には制の詞あり。連歌にはあなち斟酌すべき事なし。同類

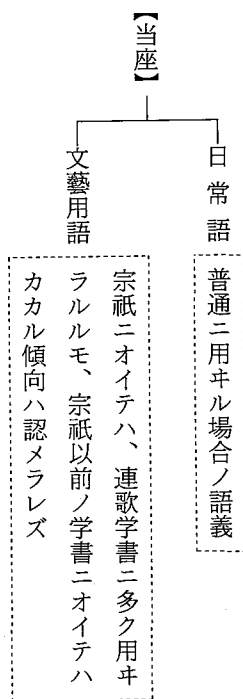
こそ我人取ちかへく聞る様に侍れとも、正しく四十七の一字
もかはらざるはなし。それも当座にてもさやうの沙汰あれば、
連歌のとこほりとなり、無興なるなり。

〔心敬・ささめごと〕 * 日本古典文学大系

歌には代々歌合とて、作者の名を隠して、当座にさまざまの褒
貶にあひぬれば、いさゝかのとがまで明らかめ知る也。

以上の用例を通覧する限りでは、宗祇の連歌学書に見られた偏り
は認められない。むしろ、「その場」と解しうる方が多いといへよう
か。

当座の語義に関する検討を整理する。



従つて、「両度聞書」における「当座」の語義は、とりあへずは日
常語として解しておいて良い、といふ事になる。但し、だとすると、
宗祇自身の用例としては、やや珍しいと評しえようか。

次に「景気」だが、これは様々な問題(9)が絡み、「当座」ほど容易には語義を確定しにくい。

『両度聞書』の「景気」の用例を整理すると、次のようになる。

景気の心	一〇七
景気の歌	一〇八・一七二・二二一
時の景気	二〇八・二六三・二八三
とぶ鴈の声さやかなる景気	二二二
景気の様	二四三
景気のおもしろき歌	二五六
時にあたる景気	三〇五
景気あらはなり	三二八
景気ヲ単独デ用キル場合	二七七・三六二

この内、最も示唆に富むのは三〇五の用例である。それは、「立どまりみてをわたらんもみぢばは雨とふるとも水はまさらじ」といふ歌に対し、「時にあたる景気也」とだけ注するものである。簡潔すぎる注で、十全な理解はしにくいのだが、要するに、この歌は叙景歌なのだ、と説いてゐるのだらうと思ふ。即ちここで、

景気＝景色

といふ等式が成立してゐる事になる。

『両度聞書』以外の用例はどうだらうか。

今一度本文を引く。

当座の景気へのぞみてよめる事もあり

「のぞむ」といふ動詞の目的語としても、先の解釈案は問題がない。そこで現代語訳を示せば、

その場の景色乃至雰囲気臨んで(《題シラズ》)トイフ設定デ題ヲ特ニ設ケル事ナク(和歌を詠む事もある。(ソノヤウニ詠マレタ和歌ガ勅撰集ニ採ラレタ場合、撰者ハ詞書トシテ「題シラズ」トイフ記号ヲ冠スルノデアル)

とでもならうか。

本節では如上の訳を正に一応の結論として提示するにとどめるが、実は問題はこの訳を得たことで更に深まるのである。即ち、

(1)とするならば、撰者は詠歌の《場》をかなりの程度知りえてゐたわけで、それにもかかはらず《題シラズ》と括つてしまふのは、妙ではないか。

(2)仮に、そのやうな撰集のカラクリがあつたとして、常縁・宗祇を含めて我々は、《題シラズ》といふ「記号」をいくら眺めても、どの《題シラズ》歌がそのカラクリに支へられてゐるのかを弁別する事は、不可能なはずである。仮に、各々の家集にまで立ち戻り、種々考証の結果、撰者達の配慮が理解出来たとしても、さうしなければ読めないやうに勅撰集なるものが出来て

〔常縁・月花集拾遺〕 *温泉寺本(石川常彦『月花集拾遺』)

雲はみなはらひてたる秋風を松に残して月をみる哉(二三)

……大空の雲おさまりつきて風たゝ松はかり音する跡也景色みるやうに覚て歌奇絶也

*コノ他用例多シ。因ミニ石川常彦ハ「たゝ雲のなひきたるに春風の吹たるは景気まで成へし」(二二)ノ頭注デ、「景気」は素材としての言語を組み合わせることで構成される自然の情景的場面が予測する情調」ト説イテキル。「景気」景色」トイフ連想ヲヨリ深化サセテ解デアル。

〔連理秘抄〕

景気 これは眺望などの面白き体を付くべし。

〔素純・かりねのすさみ〕 *統群書類従本

まつ歌をよむには。道を第一にして。時節の景気にも化すれば。全く貧着はあるへからさるものなり。

やはり、「景気＝景色」といふ等式を大きく逸脱するものはない。以上の検討を通して、先に立てた見通し、《当座の景気》和歌が詠まれたその場の景色乃至雰囲気は、種々の面から見て、誤りはあるまいと思ふ。

「当座の景気」の語義は一応右記の如くだとしても、いまだすつきり意が通つたとはいへない。何故なら、文脈の中で捉へ直すとういふ事になるか、を検討しなければならなかつたのである。

あるとは信じ難い。ゆゑにかかる論法は、悪しき観念論といふ批判を招いても致し方あるまい。

②会所の斟酌

『両度聞書』には他に用例はないが、『東野州聞書』にいくつか見える。

◇宝徳元年十一月廿八日、公方様の御会所作り立てられし、始めて御会あり。(巻二)

◇会所の亭主と同姓ならむ人は、たとへ季の日を書くとも、姓をば不可レ書。(巻三)

これらは、和歌会が催される晴の場所、と括る事が出来よう。「会所」の用例はそれほど多くはないが、やや古い用例として、

〔無名抄・千鳥鶴の毛衣をきる事〕 *築瀬一雄氏『無名抄全講』

俊恵法師が家をバ歌林苑と名付けて、月毎に会し侍りしに、祐盛法師其の会所にて……(10)

をあげる事が出来る。更に、常縁・宗祇とはほぼ同時代の用例では、

〔貞成親王・椿葉記・永享3年2月7日条〕 *村田正志氏『証註椿葉記』

あくる年のむ月の比、室町殿より勤修寺中納言を御使にて恩招にあつかりしかは、きさらきのはしめ、閣閣へまいりて御会所山水なと見廻は、軒端の梅か香は薫麝を散にことならず。池辺の柳の影は翠黛をひたせるに相似たり。会所は飴金玉をならへ、宴席のよそひ錦繡をしけり。

〔貞成親王・看聞御記・永享3年2月7日条〕 *統群書類従完成会本

御会所已下山水等可レ有ニ御一覽一之由伺申……奥御会所〔此所被レ儲ニ一献一〕・常御方・観音殿・御厩……所々見廻、凡会所〔奥・端両所〕以下荘嚴置物宝物等驚レ目

〔実隆公記・文明7年7月11日条〕 *統群書類従完成会本

自ニ今日一当番也、未刻著ニ束帯一参内、被レ進ニ御盃一、入レ夜渡ニ御御会所一、源大納言・滋野井・民部卿・俊量朝臣等祇候。

などがある。『椿春記』『看聞御記』に貞親王が語る室町殿の会所の絢爛さは、会所が室町の人々にどのやうなイメージを伴つて理解されてゐたかを窺ふ、絶好の資料といへよう。即ち、会所↓晴の場

といふ連想が、室町の世においてはごく自然だつたのではないか、といふ事だ。

なほ、室町時代の会所のもう一つの側面に関しては、野路脩左氏の次の論が頗る示唆に富む。

※文明9年本・延徳3年本・宗長聞書、略同文。

〔筑波問答〕

勘能宿老にゆづりて、末座に斟酌あるべき也。

これらの用例の意味は「はばかり」「遠慮する」などと考へて良いだらう。

同時代の用例はどうだらうか。

〔良基・九州問答〕

人ノ連歌ヲ待テ可ニ斟酌一候哉覽

〔兼良・新式今案奥書〕 *岩波文庫本

右応安新式者、此道之龜鑑也。永不レ可ニ違背一。但未レ定事、近日相論之題目等、或以ニ愚意一料ニ簡之、又訪ニ宗御法師意見一、粗所ニ記置一也。但此外漏脱条々、及ニ満座諍論一自他加ニ斟酌一。後日訪ニ先達一、可レ決ニ是非一者也。

享徳元年壬申十一月日

関白御判

これらは「考へを巡らす」などといふ意味か。

なほ、室町の碩学の一人、清原宣賢が「斟酌」につき興味深い注を残してゐるので、ここにその説を紹介しておきたい。

〔清原宣賢・御成敗式目抄〕 *中世法制史料集・別巻

斟シヤクラ、常ニハ〔一〕辞退スル方ニ得タルカ、其義ニハアラス、斟酌トハ、量ニ浅深一也、斟量ト云ニ同シ、浅深ヲハカル

会所は、改めて断わるまでもないが、公的な接見の場所である。芳賀幸四郎氏はさらに「日常起居の場所」でもあつたとしておられるが、従いがたい。それは主としては無論常御所においてであつたからである。だから氏の言は「会所は常御所とともに世俗的な生活の中心であつた」という風にいいかえられねばならないと思う。〔同氏「日本中世住宅史研究」〔日本学術振興会〕昭30・3〕二八頁

つまり、確かに「会所↓晴の場」といふ実態はあつたにしても、それはあくまでも一面であつた、といふ事だ。

○

次に斟酌。

『両度聞書』の「斟酌」はここ以外に用例がないが、宗祇自身の用例はいくつか見られる。

〔宗祇・天理本名所百韻注・奥書〕

此条々、尤斟酌候得共、尊命之由承候間、仰ニ随而、外聞迷惑之至候也。

宗祇在判

文明十六〔甲辰〕年孟秋十九日

〔肖聞抄〕 *文明12年本

は、なん藤原、四姓の中にも藤氏は賞翫なれば、かくいへり。家のたかく思あがりたる人は、斟酌の心もなく、風流なる人にあはせんとするべし。〔十段〕

ヤウニ、宜ニ從テハカライ行事ヲ斟酌ト云

※宣賢『左伝聴塵』〔一〕ニモ同様ノ説見ユ

即ち、室町時代語としての「斟酌」の通常の語義は「辞退スル」であつた、といふ事が想像されるのである。但し、宣賢のこの注は、下記のごとき式目注釈史の中で評価しなければならぬ。

〔御成敗式目注池辺本（天文頃写）〕 *同前

斟酌ト云フ二字ノ心フカシ、斟酌（クミクム）トヨマセタリ、水ヲクミクンテ置テ用所ヲ待也……当ニ于其時一可レ被ニ斟酌トハ、其時ヲハ五十日モ卅日モサシキテ、水ヲクンテ用所ヲ待ガ如クニ、ヒカヘヲキテ、連々ニ糾明スヘシ

〔清原業忠・貞永式目聞書〕 *同前

斟酌トハ打ヲカレイテハ無ソ、其罪ノ浅深ヲハカリハカツテ可レ被レ行レ罪也、尋常ハ物ヲ辞退スルヲ斟酌ト云、此ハ、ハカリ、ハカル也

さて、以上の用例〔一〕を踏まへて「会所の斟酌などによること」に籠められた含みを想像してみよう。「会所」とは晴の和歌会の場合、及びそこに連つてゐる人々の意味であらう。「斟酌」は配慮・思案などの意味と考へてよい。すると、「会所の斟酌」によつて『題しらず』といふ枠が、その和歌会において設定される事となるのだ、と宗祇が主張してゐる事にならうか。

しかし良く考へてみると、《題しらず》といふ設定で催された歌会が、現実にあつたのだらうか。あるいは実在しなくともよい、理念上、充分なる妥当性を有してその存在を想定する事が可能だらうか。筆者はいづれに対しても懐疑的にならざるをえない。少なくとも筆者の知りえた歌会資料の中で、《題しらず》と明記されてゐるものはない。現実にはないものを一旦想定し、それを根拠に『古今集』の詞書を合理化するのは、いささか無理があると思ふのだ。

百歩譲つて、そのやうな歌会が、現在は知られてゐないが、当時稀ながらも存在したとしよう。しかし、『古今集』時代にもあつたかどうか、宗祇といへども断言は憚られるはずである。「会所の斟酌などによることもあり」といふ断定口調から、かかる読みを引き出すのは無謀である。

このやうな難点(第二節で示した⑤の問題)が確かに残るけれども、今その含意は措き、現代語訳を上掲のやうに考へておいて良いだらうと思ふ。

四、「題あれども心あらはれざればいへる事」の解釈

所で、『両度聞書』における題とは一体何だらうか。このやうな一見愚かしい疑問をあへてここに呈示するのは、別してゆゑがある。といふのも、『両度聞書』で現在いはれる所の「詞書」の概念を専ら表す言葉は、実は、「題」ではなく「こと書」なのである。もう一つ、『両度聞書』が「題」なる語を用ゐるのは、この用例を除くと、

はないか。

以上の前提を踏まへて、この条の試解をここに呈示しておく。

撰者達は、実は、歌題を知つてゐた(『「題あれども」』。然し、題意と和歌の内容がそぐはないと判断して(『「心あらはれざれば」』、あへて歌題を記する事をしなかつた(『「いへる」』)。

管見では、これが最も自然な解釈だと思ふ。但し、もし仮にこの解釈が正しいとすると、直ちに次の疑問が導き出される。

〔撰者はどこまで詞書内容に手を加へたか〕

〔そもそも詞書への撰者の〈介入〉はありえたか〕

必ずしも詞書のレベルでの言ではないが、『両度聞書』総体を見ると、宗祇は『古今集』を撰者、就内貫之の《作品》と解してゐたふしが散見出来るここではその事を偲ばせる一例を見る事にする。

三五七(三六三)は、屏風歌の連続である。各歌に対する『両度聞書』の注を、「」に入れて示した。また() は家集の入集状況である。

内侍のかみの、右大将藤原朝臣の四十の賀しける時に、四季のゑかけるうしろの屏風にかきたりけるうた

春日野に……(素性集)

(そせい法師)

あの「題しらず」の場合だけなのだ。用例は三番歌を除くと僅かに一例を数へるのみ。即ち、

序の小注に「馬よりおつる」といふにも心あり。こゝにては、題しらずと書る事めでたき也。(二二六)(14)

といふもの。要するに、引用の形でしか「題」といふ語は出現しないのである。この現象の暗示する所はなかなか奥が深い。

いま仮に、

〔詞書Ⅱ和歌の詠作事情を記した文章〕(15)

と定義すると、「詞書」と「こと書」とは、ほぼ同義と考へて良いだらう。然し、例へば、『両度聞書』が「こと書」と称するものの内、九五五の詞書「おなじもじなき歌」は、厳密には詠作事情とは呼びえないかもしれないけれども、「こと書」の全用例47の内、かかる例は僅か2例(もう一例は二二七)だから、文字通りの例外として排除しても良いと思はれる。

とするならば、一体「両度聞書」における《題》とは何かといふ、最も基本的な次元にまで立ち戻つて、本来は論を始めるべきなのであらう。

まづ、次の事は確認して良い思ふ。

①《題しらず》の「題」と、「題あれども」の「題」を、単純にイコールで結ぶ事は危険である。

②後者の「題」は、より狭義のそれ、即ち「歌題」に近い意味で

〔素性奉行としておほせける屏風にかける歌也〕

山たかみ……(躬恒集)

〔みつねが歌也〕

めづらしき……(友則集)

〔貫之が歌也〕

すみの江の……(躬恒集)

〔躬恒が歌也〕

千鳥なく……(忠岑集)

〔忠岑が也〕

秋くれど……(素性集)

〔作者同〕

しら雪の……(貫之集)

「……貫之が歌也。この七首、素性歌ばかり作者ありて、のこりなし。此作者は四人也。屏風歌ごとく人によつて如此といふ義もあり。又屏風の歌も悉は入らず。其内ぬきて是に入といふ義もあり。未分明。所詮此時素性奉行を承て配分してよますれば、素性が歌の様に入也。其故は此集は四人の撰者なれども義にいたりては貫之一人の義に成なり。又此集の歌はみな御門の御歌になるといふ習もあれば、素性奉行するにより一人名ありとぞ。猶可尋之。」

明らかに素性歌ではない撰者詠が、あたかも素性歌の如く入集されてゐる事に対する一種の合理化である。宗祇の考へは、「所詮此素

性奉行を承て配分してよますれば、素性が歌の様に入也」といふ一文に要約される。即ち、宗祇は撰者達にかかる「力」を付与してゐるのである。直後の注「故は此集は四人の撰者なれども義にいたりては實之一人の義に成なり」から想像するに、「撰者」を「實之」といひかへても良いかもしれない。

先程掲げた疑問、

〔撰者はどこまで詞書内容に手を加えたか〕

〔そもそも詞書への撰者へ介入〕はありえたか〕

は、これを以て一応解決されたといへる。無論、三番歌においても宗祇が同様の解釈をしてゐた、とはいひ切れないが、その蓋然性は高いと思ふ。

第二節で掲げた疑問の内、本節に関するもので論じ残してゐるものがある。それは、

⑦そして、「いへる」の主語は誰か。『古今集』の撰者かそれとも作者か。

といふものであつたが、以上の論旨に則れば、撰者であると結論出来よう。

五、「さだまらぬ事」の解釈

「さだまらぬ事」の部分に関する疑問をもう一度引く。

可レ尋(二四七)

可レ尋之(六二二)

などである。無論、判断留保が『両度聞書』の特色である、などといふつもりはさらさらないが、(5)の可能性ははまだ残されてゐる、といふ事の一証左にはなると思ふのである。

さきに結論を述べよう。小論では(3)を採らうと思ふ。何故ならば、(3)の立場を支持する有力な証言が他ならぬ『両度聞書』の中に見られるからである。といふのも実は、『題しらず』説が『両度聞書』にはもう一箇所あるのだ。

題しらず よみ人しらず

大かた此二は第一巻に書了。猶々種々の義あり。事によりて、いづれをも用べき也。しかはあれど、此義尤此集の肝心にや。

義ある歌などは題をかき侍らん事本意なきにこそ。……(九八

一)

この注の存在意義や解釈は、後に節を改めて詳述するつもりだが、とりあへず本節にかかはる点だけを述べると、「猶々種々の義あり。事によりて、いづれをも用べき也」といふ主張を最も無理なく説明出来る立場が(3)である事は、まづ以て間違ひない。従つて(3)を採るのが最も自然なのだが、それには一つの留保が必要である。即ち、

⑧最後の「さだまらぬ事也」の意味は、

(1) A・B・C いづれの場合も想定しうるが、この三番歌においては、そのいづれか、決定出来ない。

(2) A・B・C いづれの場合も想定しうるが、それはあくまでも一般論であつて、実際の事例に当てはめて考へる事は難しい。

(3) A・B・C・D・E……と、『題しらず』を説明しうる見方は色々あるが、そのいづれか決定しがたい。

(4) A・B・C がいづれでも「……事もあり」といふ文型をとつてゐるのだから、いづれも真と考へてをり、どれか一つのみを真と断定する事は出来ない。

(5) 「さだまらぬ事也」といふ一種の不可知論が、A・B・C に続く第四の見方である。
のいづれであらうか。

最も素直な解釈が(1)であらう事は、筆者も認めるが、いつて、(2)(4)を積極的に否定する根拠も全くないのだ、といふ事もよくよく肝に銘じておく必要がある。世に合理的思考といはれるものなど、この程度のものである。この伝でゆけば、(5)をすら一笑に付す事も危険だらうと思ふ。『両度聞書』には、先人の説を仰ぐべく、一旦判断を留保・停止する事⁽¹⁶⁾がしばしばあるからである。そのいくつかを抄出すれば、

此歌猶可レ受二師説一(二二九)

常縁から宗祇が三番歌の注を伝受された時、九八一番歌の注に見えるが如き含みがあつたかどうか、疑問とせざるをえない。

つまり、九八一番歌の注は、そこまで伝受が進んで来た段階で、初めて齎らされた蓋然性が高いのである。仮に、『両度聞書』を書物上の静的存在として理解するならば、九八一番歌の注を三番歌の注の解釈に援用する事は全く問題ないが、講釈の現場まで遡及しようとする小論の如き立場では、かかる方法を積極的に採る事は出来ない。

といふものである。但し、この留保は文字通りの留保で、(3)否定するほどのものではない。

なほ、(3)を採るのには、(1)(2)(4)(5)が他に傍証がないといふ、消極的な理由も一方にはある。

六、九八一番歌の《題しらず》説

前説で指摘したもう一つの《題しらず》説が孕む問題をここで指摘し、解決の意図口だけでも見出したい。

第二節で列挙した疑問点を引き継ぐ形で示してみよう。

⑫何故宗祇は、ここで改めて《題しらず》説をとく必要があつたのか。換言するならば、それ以前に沢山の《題しらず》が存在してゐるにもかかはらず、何故ここで《題しらず》説を再び述

べたのだらうか。

⑬「義ある歌」とは何か。それを書くとき「本意な」といふその「本意」とは何か。

この二点で当面する問題だと思はれる。⑫は後の節で述べる機会があるから、本節で詳述するのは避け、⑬を考へてみたい。『両度聞書』における「義」の用例を整理しつつ示すと、次のやうになる。

(a)心は義なし

一四四・一七九・二二九・三三三・三三七・三四九・九〇五

(b)歌は義なし

一五五・三四三・三四四・三六四・四一四・四六三・五八三・六六一・一〇五七

(c)義なし

〔用例多シ、計61例〕

(d)おもては義なし

二三八

(e)義あらはなり

二四一・六〇七・六一〇・六三六・一〇二〇・一〇二一・一〇二五・一〇九〇

(f)うへは義なし

二四五

(g)義明也

四六四・一〇九一

(h)ある義に云

一〇九三

これらの「義」は、ほとんど「和歌にまつはる含意」「特記すべき和歌一首の世界」とでもいふべき意味に収斂すると思ふ。とすると、宗祇流古今字が認識してゐるもう一つの和歌世界―下の心・裏説などと呼ばれるもの―と、この「義」を関係づけて考へたくなるのだが、然し、『義』下の心・裏説とはならないのである。何故かといふと、例へば、

義なし。下の心、会者定離の理をば歎くまじきのをしへ也。(四二九)

義なし。下心、人の言の表裏あり。又、心詞のたがふ、是をするべきのいさめ也。(一〇四〇)

などを見れば明らかな如く、「義」と「下の心」とは同時に存在しうるからである。無論、全く関係が無いとはいへないだらうが、『義』下の心・裏説とは考え難い。

ここで、「義ある……」といふ用例がここ以外に全くない事にも注意を払ふ必要がある。即ち、こと視野を『両度聞書』に限定するならば、「義ある歌」を的確に理解する事は絶望的といへよう。然し恐

らく、常縁と宗祇の間では、無言の了解が成り立つてゐたはずである。どうやら、『両度聞書』の中に閉ぢ籠つてゐては、『両度聞書』

を解釈する事さへ無理なやうである。

七、注釈の立場

第二節で掲げた疑問で、⑨⑩は対で考察されるべき性格のものである。今一度掲げる。

②そもそも、三番歌における宗祇の説明の方法は、

〔室町時代の歌会・連歌会、あるいは撰集における実体験↓

『古今集』に援用する〕

〔『古今集』の解釈に、同時代の知識は援用されてゐない〕

のいづれであらうか。

⑩前項を考察する場合注釈の本文が現在形で一貫して書かれてゐて、明確に過去を表す言葉「き」「けり」が全く用ゐられてゐない事と、結びつけるべきだらうか。

⑨に関しては、残念ながら筆者にこれといつて問題解決に有効な視点は無い。但し、常識論ではあるが、同時代の知識を全く援用せず、注釈がなされると思ひにくい。従つて、〔同時代の知識を『古今集』に援用した〕と考へるのが、穏当と思はれる。

⑩はほぼ明らかにしうる。他ならぬ三番歌の歌注に次のやうに見

える。

……雪は吉野山たかき所なればよみならはし侍る也。……

「よみならはし侍る」の主語は、「古今時代の歌人」乃至は「作者」と同時代の歌人」だらうから、「侍る」と現在形で書かれてゐても、「侍りける」「侍りし」の意味で解して良い事になる。つまり、『両度聞書』の文体には明確なる時制が存在しないのである。

八、宗祇流古住からの読みとその方法的妥当性

前節まで検討した如く、語義の確定及び『両度聞書』の内部に籠つた読みだけでは、どうやら全き解釈に到達しないだらう、といふ見通しを残念ながら立てざるをえないやうである。不確定の要素が余りに多過ぎるし、仮に『両度聞書』に書かれてある文言を完全に解説したとしても、いまだそこに語られざる何物かが残されてゐるやうな予感を禁じえないのである。注釈を暗黙の内に支へてゐる数多くの前提、語らない事で逆に語られた事になる事柄、さらには常縁や宗祇すら意図してはゐなかつたであらう事などが、幾重にも存在するはずで、それらの注説を（少なくとも）視野に収めない限り、我々は『両度聞書』を読んだ事にはならないはずである。

その場合、宗祇の講釈の聞書がいくつか伝来してをり、それらの説が頗る魅力的に映つて来る。宗祇の講釈の直接の聞書としては、現在までの所、以下のものが知られてゐる。

- *古 聞 宗祇↓肖柏
- *鉆訓和詞集聞書 宗祇↓某、宗祇略抄とも
- *難波津泰謚抄 宗祇↓宗長・泰謚
- *十 口 抄 宗祇↓宗碩
- *宗 碩 聞 書 宗祇↓宗碩
- *文龜2年注 宗祇↓某

この内、『難波津泰謚抄』は現在曼殊院本しか知られてをらず(17)、調査しえなかつた。以下順次注文を掲出し、逐一解釈を試みたい。

〔古聞〕*国会図書館蔵本(WA一六・一三一)

説ある事也。時にのそみてよむ哥の題なとならてよめるを、題不知といふ也。又は、あまたの物をよみて、いつれを題とわきかたき哥などをもいふ。又は、会所なとさしもあらぬ所にてよみたる哥をは、題なとありしをも題不知とする事あり。(三番歌詞書注)

以前注了。又此二において子細あり。義ある哥なれば、よみ人しらす、哥の数のおほく入事をはかりて隱名事あり。又、神詠・勅詠などにもあり。此題不知は神詠之故也。(九八一番歌詞書注)

『両度聞書』の説と大略重なりといへようが、細部になると解釈によつては、食ひ違ひが見られる。

最後の「会所なとさしもあらぬ所にてよみたる哥をは、題なとありしをも題不知とする事あり」とは、これまた『両度聞書』の「会所の斟酌などによる事もあり」に見事に対応する。ただ解釈が微妙に分かれる。即ち、

会所など〔デ、ソノ内〕さしもあらぬ所
会所など〔ソノ他二〕さしもあらぬ所

の二通りが考へられる。中世語としての「会所」の語義を踏まへるならば、前者に解するのが穏当と思はれる。要するに、先に見た室町殿の会所などは全く異なる、ごく私的な言葉を変へると藪の―会所での歌会での歌では、実際に題が設けられて出詠されたとしても、撰集に入れる場合は、その題を私的ながゆゑに、題を省略する事もある、といふ謂であらう。

以上見て来た如く、三番歌詞書注に関する限り、『両度聞書』の検討を通して得た基礎知識や前提が、そのまま活きる事が分かつた。『両度聞書』の延長線上にある、と見てよい。ところが、九八一の方はさうは行かない。「又神詠勅詠などにもあり。此題不知は神詠之故也」といふ部分は、『両度聞書』が(少なくとも表面的には)全く触れてゐない角度からの注であり、改めて厳密な解釈を施す必要がある。

『古聞』はこの歌の場合、神詠なので《題しらず》と処置したのだ、と主張してゐるわけだが、ここだけでは理解が難しい。注の統

「時にのそみてよむ哥」とは、《四季歌》の謂だらうか。あるいは、当座詠の謂だらうか。仮に前者と解すると、これはあくまで四季歌について成り立つ題不知の説明である。といふのも、『古今集』を通覧すれば明らかな如く、題不知歌はむしろ恋・雑部に集中してをり、この説明をそこまで援用する事は不可能だからである。後者と解すると、歌会などで、これといつて題を設定せずに詠んだ当座詠といふ事になる。然しこの解釈は、前にも述べたやうに、室町時代によつて歌会が存在したかどうか疑問で、不安を残す。ただ、『両度聞書』の説を文字通り受け入れるならば、あるいは『古聞』の如き「解釈」が最も素直な立場である事も、また確かである。『古聞』に『両度聞書』の《注》としての機能があつたのかどうか、これは慎重に検討する必要があるけれども、一つの見通しとして視野に入れておく事にする。

「あまたの物をよみて、いつれを題とわきかたき哥などをもいふ」といふのは、『両度聞書』の「題あれとも心あらはれされはいへる事もあり」に対応する注だらう。要するに、一首の歌の中に余りに多くの歌材が詠み込まれてゐて、撰者が一体何が《題》なのか判別しにくい、といったケースと思はれる。ただし、ここでも『両度聞書』の問題に似た、撰者の権限論を論じなければならぬが、どうやら『古聞』の立場が、『両度聞書』の再説にあるやうだから、『古聞』をこの角度から分析しても、余り実効はないと思はれる。ゆゑに、解釈に際してのヒツカカリは、全く新たなものでない限りすべて不問に付し、前節までの検討に譲る事にしたい。

きを見よう。

……是神明之誓也。夫日本は神国也。神代より人の世となりて、仁義五常出来れり。大道廢て仁義興之理也。仁義も又すたれて、人々失正成邪之故二、日神此時和光同塵し給て、避邪立正之徳をほとこします。……いたりてはたゞ無事の境界に、身をおさめよとの心を、神のめくみましますなるへし。日神の神詠也。人に託しなとありけるにや。

日神、即ち天照大神の詠だといふのである。『古聞』がいかなる根拠を以てさう判断したのか、判然とはしないが、『両度聞書』の妙に曖昧な物言ひ「義ある歌」といふのも、『古聞』のいふやうな背景があるとしたら、理解は充分可能である。《義ありし神》といふ連想は室町人にとつて、それほど不自然ではないと思はれるからである。然しそれで『両度聞書』の曖昧な物言ひの不可解さが解決したわけではない。何故『両度聞書』では曖昧な形でしか述べず、後に『古聞』になつて明確に述べる(乃至は述べうる)やうになつたのか、といふ史的な展開を説明する必要があるに生ずるからである。

ともかくも、『古聞』は『両度聞書』を解釈する上で、あたかも参考書なり副読本の如き機能を果たす事が、いよいよ明らかになつて来た。これは事実と認めても良いと思ふ。問題は、さうやつてテクストとしての『両度聞書』を読むのが正しい方法といへるかどうか、といふ事である。Aなる文献資料が、構造的に、Bなる文献を必須

としてゐて、Bなしには解説しえない、などといふ事がありえて良いものかどうか。無論、国文学の注釈にあつては、Aに対するBといった構図にしばしばお目にかかる。一例を示せば、『紫式部日記』に対する『御堂関白記』『権記』『小右記』『不知記』であらう。然しこの場合、紫式部自身もその心積もりで『日記』を執筆したかといふと、多分さうではあるまいと思ふ。我々後代の読者が、万やむをえずして記録類を参看してゐるに過ぎないのである。恐らく、紫式部と同時代の読者なら、『日記』だけで充分理解は可能だつたらうし、そもそも文学作品とは(原則として)そのやうなものはずである。

【鈔訓和調集聞書】*宮内庁書陵部蔵本(二六六・一四五)

題不知と云は、当座の興などを云也。又、所やなどは、かりなるをいひ、又、霞にせんか雪にせんかな、と云所をも云也。

(三番歌詞書注)

(九八一番歌注ⅡX)

【鈔訓和調集】の場合、注の絶対量が少ないので、『古聞』の時のやうにはつきりとした見通しはつけがたいが、『両度聞書』との関係は、『古聞』と全く同じと理解出来よう。ただ、「霞にせんか雪にせんかな」とは、撰者の立場ではなく、歌人の立場とも解しえ、『両度聞書』『古聞』とはいささか理解を異にするかもしれない。これは、宗祇自身の見方の変化といふよりも、聞書者の理解ととるべきだから。

自然であらう。また、「余多……」とは、題が残されてゐないので、撰者たちが歌の内容から題を帰納しようとしても、〈歌材〉が大量に詠み込まれてゐるためになしえぬ場合と解してゐるのだらう。注とはそもそもこのやうなものかもしれないが、この解釈は、『両度聞書』を過不足なく理解しようとする立場のものでは必ずしもない。『両度聞書』の説を発展的に理解しようとするものである。従つて、『両度聞書』を「十口抄」で以て理解しようとするのは、方法的に逆立ちしてゐるのである。

【宗碩聞書】*慶應義塾大学図書館蔵本¹⁹⁾(一三三・六二)

此義、当座の景氣にのそみ、又、会所の斟酌などによる事もあり。そは、出題の人となき所ヲ云。又、題の心あらはされはいへる事もあり。定らぬ事也。(三番歌詞書注)

大かた此二は、第一巻に書了。猶種々儀あり。ことによりていつれをも可用也。しかはあれと、此儀、尤此集の肝心にや。義ある哥などは、題を書侍らん事、本意なきにこそ。(九八一番歌詞書注)

注の内容は『両度聞書』とほぼ同一なので、考察は省略する。

【文亀2年注】*蓬左文庫蔵「古今集聞書」(一〇一・六)

当座ノ景氣ニ望テヨメル事モアリ。会所ノ斟酌ナトニヨル事モアリ。又、題アレトモ心アラハレサレハイヘル事モ侍ル也。(三

う。

【十口抄】*東京大学国文学研究室蔵本 ※行間書入注のみを用する。対応すると思はれる『両度聞書』の注を()に入れて抄記した。

(当座……)不題して也。余多ノ助を讀て、何を題と難分哥也。(三番歌詞書注)

(会所の斟酌……)出題人なき所を云。又、さしもなき所にて読たる哥也。

從來『十口抄』は二つの部分に分けて考へられて来た¹⁸⁾。即ち、

本行注Ⅱ両度聞書
行間書入注Ⅱ古聞

と識別されて来たのである。然し、上掲の引用部分を見れば明らか如く、この場合《行間書入注Ⅱ古聞》といふ等式は成り立たない。従つて厳密な立場を持するならば、『行間書入注Ⅱ古聞Ⅱ宗祇注』といふ等式が成り立たない以上、宗祇注としての資料とは成りえないのだが、ここは常識的に、宗祇注の傍を伝へるものとして処理する事にする。

【十口抄】の内容を見ると、「不題して也」とは、歌会なり詠会の場において題を設定しない事、つまり題詠ではない、と解するのが

番歌詞書注)

此哥ノ題シラス・読人不知ハ、其心アルニヤ。春部ニ此二之儀此シルシ侍レト、尚有子細物トソ。(九八一番歌詞書注)

『文亀2年注』は、片桐洋一氏により、宗祇が最晩年宗坡に講釈した折の聞書かと推定されてゐるものである²⁰⁾。これまた『宗碩聞書』と同様『両度聞書』とほぼ同じ内容なので、考察は省略する。

以上、宗祇流の諸注を見てきたわけだが、ここで一つ確認して置きたい事がある。それは、『古聞』『鈔訓和調集聞書』『十口抄』と変貌を遂げてきた宗祇注が、晩年の『宗碩聞書』『文亀2年注』に至ると、何故か『両度聞書』の説に戻る―いはば先祖帰り―現象が見られるといふ事である。無論、講釈対象や宗祇自身の老齡の問題があり、現象を単純に解釈するのは危険である。とはいへ、宗祇説には文字に残されないものの、一方で不斷に変貌を遂げつつあつたのかもしれないが、証拠が無い以上、これとてあくまでも想像にとどまる。

本節の結論をまとめる前に、宗祇自身との関連は今一つ不明確ながら、宗祇流注の一として考へて良い資料を一点紹介する。

それは『古今伝授聞書』と称されてゐるものである。片桐洋一氏の整理をまづ引く事にする。

季吟の諸注集成である教端抄には「永正記」という名で引用している。泰昭が永正一四年七月二五日から翌一五年四月一八日

まで上乘院法印宗謙から伝授された講説の聞書を中心に、永正一七年頃、同族の鳥居小路経厚から堯孝流の声点読みくせの伝授を受けて付加した諸注集成である。神宮文庫本・京都大学図書館平松本がある。（『和歌大辞典』）

基本的にはこの解説で良いのだが、宗祇とのかかはりはこれでは不明確である。そこで、京大本の識語⁽²⁾を次に引き、その点を確認しようと思ふ。

〔識語Ⅰ〕

此題号の注は、故法印泰謙、先師（一常縁ガ）宗祇へ御伝受の時、彼宗祇の聞書を此まゝ引うつさるべきのよし、申されし間、随仰令書写之由有之。今又可為同前之由仰あり。仍如御本写之畢。（序注末尾）

〔識語Ⅱ〕

此一部は、主の聞書を以て承届之處、或未決或不審之事等ありとて、家々ノ書を箱底より被取出、如此も可在之哉之由、師命也。於当座、頭書・聞書等引合。今一冊書改之。抑序者、頗事多毫昧之間、先聞之。令結願幸家之聞書共有之間、可披見之由有之。此儘序の注無之も無念之間、彼抄物共を集て、少々請ニ仰ノ旨一書ニ立之一。兩度迄令校合（押帋）、頭書・細字等、大略記早。次、先師宗祇ハ田舎人にて、天性字声あし。此段、誰人にも有相談可改云。今抄物共見合、又清濁之事ハ可加用

勅撰内、題不知ト伝ハ、多儀アル欵。又云、ハ、カリアル欵。可尋。在口伝。

「多儀アル欵」は「兩度聞書」の「さたまらぬ事也」に見事に対応する。然し我々はここで、「欵」と躊躇乃至判断保留する宗祇の認識と、「也」と断定する（宗祇）の認識の間に横たはる断絶を、よく見極めるべきである。恐らく、常縁においては、題不知に関する説が大きく揺れてゐたに相違ない。ところが、宗祇に至るとその揺れが絞られ、「欵」で止められる程度になつてゐた、といふのが真相ではあるまいか。

もう一つ、前に述べた如く「可尋」といふ《姿勢》は、宗祇注の一特質としてかねてより指摘されてゐた姿勢であつた。ここにも我々は、常縁よりはむしろ宗祇の貌を認めるべきであらう。

○

以上長々と宗祇流諸注及びその周辺の注を見て来た訳だが、その結果、『兩度聞書』の解説に資する点を多く得た事は確かである。然し、それが『兩度聞書』を読む方法として、認められるものであるかどうか、といふ点はいまだきちんと検討してゐなかつた。

結論を先に述べるならば、この方法は、いはば窮余の一策とでも評しうるものであり、第一に用ゐる事は避けた形が良からう、といふのが筆者の考へである。何故ならば、『兩度聞書』なる書物がこの世に登場したその瞬間、常縁は無論の事宗祇の脳裏に、『古聞』なり『十口抄』で展開した彼自身の説があつたとは思へないからである。

捨之旨在之。六卷抄、又以家々説、声句以下を注付しなり。永正十五年四月十八日 泰昭

一部に誤写があるやうだし、また泰昭自身、この聞書の成立のすべてをここで語つてくれてゐるわけではないので、必ずしも事は明瞭ではないのだが、小論に関連する事柄を導き出せば、

(1)『泰昭聞書』は諸注集成である事。

(2)その中に、宗祇注が含まれてゐるらしい事。

の二点は確かだと考へて良い。《題しらず》に関する注は以下の通りである。

真実不知も有。或子細ありて、貴人を憚りて如此人も有。或仏神ノ哥なども、かやうに云といへり。此読人不知は、貫之女也。勅勘の哥なれば如此人也。（三番歌詞書注）

（九八一番歌詞書注Ⅱ×）

概ね『古聞』に近いといへよう。確かに識語から想像出来た通り、宗祇注傍流とは評しえよう。

更に注目すべき資料がある。それは、宗祇から実隆に伝受された切紙を実隆が自筆で整理した『古今伝受書』⁽²²⁾（早稲田大学図書館蔵、三条西家旧蔵）に見える説である。

『兩度聞書』を読むとは、（現実にかかる行為が可能かどうかは、ひとまづ問題とはせずにいふのだが）まさにそれがこの世に登場したその瞬間に遡り、そこで解釈しようする行為に他ならない。従つて、『古聞』や『十口抄』を用ゐて『兩度聞書』を仰ぎ見るやうな行為は、もともとすべきでなかつたのである。『兩度聞書』と『古聞』が、全く別の作者の手になるものならば、我々はずつと用心深かつた筈である。所が不運にも（？）宗祇が両書の成立に深く絡んでゐるお蔭で、つひつひ無反省に両書を比較してしまつたのである。恐らく宗祇自身にとつても、『兩度聞書』とは、成立の瞬間から、自らの精神とは一歩隔たつた一つの「書物」だつた筈である。文字に書かれたものの共有せざるをえない宿命といふ意味だけでいふのではなく、聞書なる行為が本質的に孕む事柄―作者を一人に決定しがたい―とも密接に関連するのである。

むしろ、『兩度聞書』により近づく為には、常縁や宗祇たちが見たであらう様々の古注釈の説を参看する方が、方法的には正しいと思はれる。

然しだからといって、やたらに古注を涉猟し、ずらずらと並べ比較したら、それもむしろ常縁や宗祇の認識とおよそ掛け離れた結果しか招来しないであらう。何故なら、（実証は難しいが）彼らの見えた古注の総量は、我々が想像するよりもはるかに少ないと思はれるからである。そこで、宗祇たちがまづは見えたであらう古注―具體的にいへば、『頭昭注』『頭注密勘』『僻案抄』『親房注』『六卷抄』あたり―を調べてみる事にしよう。

ところが驚くべき事に、これらの注は、『題不知』に関して全く口を噤んでゐるのである。更に二条派の注釈書『耕雲注』『浄弁注』『伝兼好注』一や、もう一時代古い『教長注』などに調査の範囲を拡大しても、事は全く変はらない。常縁・宗祇以前に成立したと思はれる古注で、『題不知』に関して説を述べてゐないものは、他に以下の通りである。

『古今和歌集聞書』(佐賀県立図書館蔵)『弘安十年古今集歌注』
『三秘抄』『明疑抄』『古今口伝秘抄』(初雁文庫蔵)『伝冬良注』
師成親王注』『古今集童蒙抄』『古今集秘抄』『破窓不出書』(四辻家伝)『毘沙門堂本注』『古今集注口伝抄』(京大図書館蔵)

一方、以下の二注に説が見える。

『為家抄』*国文学研究資料館初雁文庫蔵本(二・八六)
其題、其作者探求て其人と顕す族あれとも、自然に其人の哥と家集なんとにても見いたさむは、不及申。あなち不可欲知之。但、哥の面にて心えかたからんは、尤沙汰あるへき也。(三番歌詞書注)

『為相注』*京大資料叢書本
此題不知、読人不知は、さして其題をその人のよみたるともしらぬ、不実なる事に書也。但、古今集題不知読人不知には、三義あり。さきにいふかことし。其人のよみたりけ(れ)ともた

しかにしらねとも、さすがによき歌なれはいるによりて、題しらすよみ人しらすと入たり。(三番歌詞書注)

いづれも『両度聞書』の注釈の立場・方法から、相当に距離のあるものである。例へば、『為家抄』は基本的に「あなち不可欲知之」といふ立場をとる。即ち、書いてない事を無理に知らうとするな、といふ立場である。『両度聞書』の秘儀めいた説明の方法とは、全く異なるといつて良い。一方、『為相注』の方も、これまた『両度聞書』とは事なる視点からの注釈である。

以上を要するに、『両度聞書』以前の古注で、『題しらす』を問題にするものがそもそも僅少な上、珍しく問題にしてゐる二注も、その立場・方法を全く異にするのである。といふことは、常縁にせよ宗祇にせよ、彼らの裡には、『題しらす』に加注する行為が、やや大袈裟にいへば、古注釈の歴史におけるエポックを画するものになりうる、との認識があつたと思ふのである。この事が事実だとすれば『題しらす』説に仄見えた曖昧さより明確にいふなら、分かりにくさ一は、未だ注説が熟さぬゆゑとも解しうるのである。

ところが『両度聞書』以後、『題しらす』に加注しない注釈書は、反対に僅少になるのである。その現象は、宗祇流・非宗祇流をとはない。管見に入つた諸注を以下に掲げる。まづ宗祇注の末裔たち(23)。

『平松家本古今集抄』*京大資料叢書本

カ。一哥ハカリツタハリテ、何ノ哥トモ不知。一以上。(三番歌詞書注)

此義、第一ノ巻ニクハシ。サレトモ又コ、ニテラシト、メテアソハスト被仰シ也。(九八一番歌詞書注)

『京大本古今抄』(26)*京都大学附属図書館中院文庫蔵本

読人不知ノコト、数多ノ義アリ。何ニモ書ノセテレハ、事ナカくシクナルホトニ、サシヲカル、也。(三番歌詞書注)

此事、一卷最初ニ長くト沙汰アリシ事ナレトモ、何モ爰ニテ沙汰スルコト也。

御□□

此事、何ノ抄ニモ、如此コ、ニテ又沙汰アリ。此伏見ノ哥、詮トスル故、題不知・読人不知ヲモ、又重テ講談アル歟。(九八一番歌詞書注)

次に宗祇流周辺の注。

『古今私秘聞(兼載一兼純)』*ノートルダム清心女子大古典叢書本
題不知ト云ハ別ニ心ナシ。只題ノナキ迄也。

『古今榮雅抄』*延宝6年刊本

題しらす。誠にしらぬもあり。しりてかゝぬもあるべし。……

『古今秘註(二条義徳注)』*長谷寺豊山文庫蔵

題しらすとは前の哥のことく、年の内の立春とも春たつ日共或は花時鳥月雪にわかれたる題につきてうたをよみ侍に、何の題

題不知、是にあまた心得有。或は当座の景気なとにてよむ事もあり。或は又いかなる所にてよめ、哥よければ入る。されとも会所のしんしやくの事もあり。又は題に相違するも有。かやうなるを皆題不知と入也。(北両度聞書)

『築瀬本古今聞書』(24)*築瀬一雄氏蔵

題不知とは、当座のけいきにのそみて読る事も有。又、会所のしんしやくなどによる事もあり。又、題あれとも心あらはれされは云る事もあり。さたまらぬ事也。(北両度聞書)

『大倉本古今集聞書』(25)*大倉精神文化研究所蔵

題しらすといふ事は、当座の景気にのそみてよめる事もあり。又、会所の斟酌などによる事もあり。又、題あれとも心あらはれされはいへる事もあり。さたまらず。(北両度聞書)

『東大國語研本古今集聞書(実隆注?)』*東大國語研究室資料叢書本

種々アリ。撰者・作者ハ、カリテカ、又事アリ。是二ツ也。又ハ実ニ題ナクテヨム事アリ。撰者天然シラヌ四ナリ。講云、詩ノ即事ナト云ヘル類モアリ。

『伝心抄(実技一幽斎)』*宮内庁書陵部蔵

題シラスト書ニアマタノ心アリ。一ハ当座ノ景ニ望テ読タル。一ハ指タル所ニテモナキ席ニテ読タル。一題カアレトモ題ニアハヌ。一題ノ外ノ物ヲ読入テ、何ヲ本ニセントモナキ。一読人カ何ノ題ニテ読タリトモ不知。一憚子細有テ読タル。一子細ノ長くシク、此集ノ奥ニ伊勢物語ニアル詞ナト書タルヤウナル

とはしらね共、時の景氣にあひかなふて、哥のおもしろさに付て撰集にいれらるる故に、題しらすとかけける也。

〔素純聞書〕*東洋文庫蔵「古今和歌集抄」

是は、もとより題をしらぬ事も有。事あまたあれば、いつれともわきかたき事も有。その物に即して題にてよめぬ事も有。当座の景氣にのそみてよめる事有。所によりて、さる所にてよめぬと有。定めかたければ題不知と云也。

〔古今和歌集註〕²⁷ *京都大学附属図書館中院文庫蔵(中院・六・

七一)

題しらすとは時に望て何にてもよめる哥也

いづれにも『両度聞書』の影響が濃厚である事は、一目瞭然であらう。「題不知ト云ハ別ニ心ナシ。只題ノナキ迄也」「題しらす。誠にしらぬもあり。しりてかゝぬもあるべし」などの、一見すると意味をなさぬやうな注も、その背後に『両度聞書』の存在を想起するならば、解釈は極めて容易である。

因みに、『両度聞書』の以後の諸注で、『題しらす』に加注しないものは、左記の注である。

古今抄延五記(堯恵↓憲輔)・蓮心院殿説古今集注(冷泉)持為抄

それぞれの学統を代表する諸注が、『題しらす』に加注してゐない

るいは全く別の局面が出現するかもしれない。

論すべき視点や資料もまだあるだらうし、何よりも論・考証の脆弱さは否定しえない。ご教示を頂きつつなほこの問題を考へて行きたい。

(4/30/87)

【注】

(1) この「勅撰集を『総体』として読み解く方法」について、既に松村雄二氏に「勅撰集を総体としてとらえ直す必要性が顧みられてきたこと。詠み人しらす論などは魅力的な課題であらう」(『和歌文学研究』51・編集後記)なる提言もあり、ここで筆者が蝶々たらんとする必要はないのかもしれない。然し、これはいふは易く行ふは難き好例とも思へ、あへて一言した次第である。

(2) 小論に最も緊密に関はる論を一つだけ挙げれば、吉川栄治氏の「題しらす」という語について(『講座平安文学論究 第二輯』(『風間書房』昭60・5)所収)が、正に緻密にして重厚な論を展開してゐて、極めて刺激的である。「古今」以前及び同時代の平仮名・漢字資料を博搜し、『題』モチーフといふ結論を導き出されてゐる。従つて「題しらす」とは「モチーフ不明」の義ということになる。訳である。筆者にこの結論を云々する準備は全くないが、従来の通説(題しらす=詠作事情不明)よりは、遙かに多くの用例を説明出来る見解だと思ふ。なほ、吉川氏は「両度聞書」の三番歌詞書注の「題しらす」説について、「当座詠であるためにか、撰集上の意識的処理」「題しらすは、誠にしらぬも又しらぬもかゝらずしてまさる時かゝぬも有べし」(『余材抄』)のごとき事情で、いづれにせよあるべき歌題表記を逸した歌で、そういった諸種の事情を括することば「題しらす」という見方である。要するに、「題詠」を自明の前提とし第一義的に考へるいかにも中世的な理會であつて、これを極言すると、『題不知ト云ハ別ニ心ナシ、只題ノナキ迄也』(『古今私秘聞』)、多少和らげて言

事は、やや注意を要しよう。あるいはここから、暗黙の否定の意志を読み取り事も可能だからである。

○

さて縷々検討を加へて来た訳だが、先にも記したやうに、そもそも諸注を参看しても、『両度聞書』の解釈の資となる事はないといふよりもすべきではないのである。原理原則はさうである。然し、これらの検討を通して我々は、『両度聞書』のあの注が、どのやうに読まれ、かつどのやうな歴史的背景があつたのかを知る事が出来た。その事は決して無意味ではないと思ふのである。

九、まとめ

小論の結論は、実に簡単である。即ち、

『両度聞書』(に限らず、『聞書』と名の付くすべての文献資料)は、それ自体では完結してゐない。従つて、それ自体だけで解釈するのは、不可能である。

然しこの結論は新たな地平を開く。だとすると、常縁や宗祇にとつて、おのが生み出した『両度聞書』であつても、一つの「作品」でしかありえず、その意味では我々遙か後代の読者も(原理からいへば)常縁・宗祇と同じ立場に立ちうるのだ。

新たに切り開かれたこの地平に立つと、聞書の解釈の方法に、あ

えば、『撰者に題が不明である場合、またもともと題詠でない場合』ということになる」と述べておられるが、従ひ難い。その理由は以下の小論から明らかだが、一点だけ言及しておけば、『古今私秘聞』のものいひは、明らかに宗祇流に対するアンチテーゼであり、決して延長線上には置けないものである。

(3) 以下の引用は、片桐洋一氏「中世古今集注釈書解題 三」による。

(4) 『両度聞書』には、この間の事情を語る部分が全くない。所が、『古聞』には次のやうな説が見える。即ち、「此作者二口伝あり。實之か女の内侍也。此時勅勘たるに於て、読人不知と入たり。然而此集の第三番二入たる事、名譽也。聖時之直道もあらはれ、貫之か他にことなる義もみえたり」といふもの。これはあくまでも宗祇が肖柏に語つた口伝であり、常縁から宗祇に講釈が行はれた時とかうであつた、とは無論断言出来ない。然し、およそ異なる内容とも考へにくく、『古聞』の説を以て理解しておいて、大きな誤りはないと思ふ。

(5) この事をはつきりとは実証出来ないけれども、上掲したやうに、『両度聞書』においては、『題しらす』と『よみ人しらす』が別々に、しかも論理の上で独立する恰好で説かれてをり、あるいは一証左たりうるかもしれない。ただ後掲する九八一番歌詞書注では、冒頭に「大かた此二は第一巻に書了」と見え、一具とする意識が全くなかつた訳でもないやうである。

(6) 後年の事に属するが、宗祇は自身で『新撰免玖波集』を編む事になる。その限りでは、正しくは、『両度聞書』を通した撰集の擬似体験『新撰免玖波集』、とすべきである。

(7) 片桐洋一氏「伊勢物語の研究 資料篇」による。

(8) 島原市立森岳公民館分館松平文庫蔵本(一〇〇・九)による。

(9) 歌論・歌学における「景氣」論は、特に中世において、盛んに論じられた。武田元治氏「中世歌論における「景氣」について」(『群馬大学教育学部紀要』23 昭49・3)、「中世歌論をめぐる研究」(『桜楓社』昭53・1)が、この問題を扱つて詳細である。用例の蒐集範囲

が(やむをえぬ事ながら)新古今前後に限られてゐるが、そこから導き出された結論は「歌の言外に浮かび添う形象に関する觀念」―景氣、といふものである。但しこれはあくまでも歌論における語義であつて、『兩度聞書』の景氣に当てはめる訳には行かない。また、武田氏の論の延長線上で理解を深めるならば、用例を宗祇の時代の歌書・連歌論書にまづは求めるべきである。

(10) 因みにいへば、この例が知りえた最も古い用例である。

(11) この「常二ハ」は解しにくい。「日常語としての意味では」なのか、『御成敗式目』注釈における通説では「の意なのか、判別しにくいのである。ただ、池内義賢氏編『中世法制資料集・別巻 御成敗式目註釈書集要』(岩波書店・昭53・10)に翻刻されてゐる、宣賢以前の諸注を見ても、通説と呼ぶものも存在しないやうだ。更に宣賢自身、「此書ヲ講スル事ハ旧ハナカリシヲ、寛正六年七月五日依二細川勝元所望一、放二彼亭一祖父常忠初御講説也……再三御斟酌ナレトモ、堅ク懇望ノ間、始テ講シ玉ヒヌ、是ヨリ以前此書ノ講ナシ」と、式目講釈歴史の浅さを説いてゐるし、「再三御斟酌ナレトモ」の「斟酌」が明らかに「辞退スル」意であるから、「日常語としての意味では」と一応解しておく。

(12) 『岩波古語辞典』による。

(13) なほ、「斟酌」の語義に関する史家からのアプローチとして、笠松弘至氏の「式目はやさしいか」〔法と言葉の中世史(平凡社選書86)〕(昭59・9)所収がある。ただやむをえぬ事ながら、扱はれる資料が史料に偏る傾向は否めず、そこで帰納された語義を直ちに我々の問題としてゐる『兩度聞書』に当てはめる事には、いささかの躊躇が残る。因みに、この斟酌が使はれる条の原文の現代語訳を笠松氏の前掲書から引用すれば、「人の妻と通じたものは、強姦和姦を問はず、所領半分を没収した上、出仕を(無期限に)停止する。所領のない者は遠流、女も同罪である。次に道路の辻において、女を襲ひ捕らえたものは、御家人なら百日の出仕停止、郎従以下の身分の者は、頼朝の先例にならつて、片方の頭髮を剃りおとす刑に処す」といふもの。そ

してその後に、「但於二法師罪科一者、当二其時一可レ被二斟酌一」とある。笠松氏もいはれる如く、ここでの「斟酌」は、寛大な刑を科する意として解して良からうと思ふ。

(14) 仮名序の割注に「嵯峨野にてむまより落ちてよめる 名にめでて……」とあり、「二二六番歌では一題しらず」となつてゐる事を踏まへての説。

(15) 詞書自体の定義で未だ通説と呼ぶものは存しないやうである。前掲吉川氏の論を参照。

(16) 「判断留保停止」といふものいひには、いふまでもなく表面的に見れば、といふ限定がつく。就中「可尋」に関しては、事は宗祇の思想にかかはる。赤瀬信吾氏「たづぬ」の精神(『愛知県立大学文学部紀要』31・昭57・3)の詳論によれば、「たづぬ」の精神とは、「先行する注説を尊重し継承して、先達の叡知と連続しようとする精神」である。二四七の「可尋」の直前には「人麿の歌といへり」とあり、六二一の「可尋」の直前は「人丸が歌といへり」とある。六二二の場合、左注に「このうたは、ある人のいはく、柿本人麿が歌なり」とあるから、かかる注記もさまで訝かる必要はないかもしれないが、二四七の方は入題しらず・読人しらずの歌、一見奇異の感を与えるが、この歌「柿本集」に入集してゐる上、「拾遺集」に人麿作として入集してゐるのだから、極めて穏当な注説であり、赤瀬氏がこの言葉に初学の者への心配りを読み取られるのも、ゆゑなしとしない。赤瀬氏の見方は正にその通りだらうと思ふが、形式的にいへばやはり判断の留保に他ならず、小論では専らその方向から見てみたのである。

(17) 『難波津泰謚抄』は宗祇伝・宗蝶泰謚受の由だが、泰謚伝・泰昭受のものに、『泰昭聞書』(京大・神宮他、後述)があり、泰謚自身の説はある程度知る事が出来る。

(18) 尤も、近時平澤五郎氏は「十口抄」が、その源泉たる『兩度聞書』を基底におき、その土台の上に、宗祇講授、就中連歌師系統伝受の聞書を代表する肖柏・宗碩の両聞書を以つて補強し、連歌師系流の

宗祇解釈を集成化、あるいは完成化を目論んだ、その結果と見ることが出来る(『後掲論文』)と整理され、整理がより進んで来た事は事実である。

(19) より直接的には、平澤五郎・川上新一郎・石神秀美氏「慶應義塾図書館蔵宗碩自筆『古今和歌集聞書』」(『斯道文庫論集』21・昭60・3)によつた。なほ、平澤氏の手になる解題は、ひとり『宗碩聞書』にとどまらず、宗祇流古注総体の流れをも見通す卓抜なもの、小論も参考にした。

(20) 片桐氏「中世古今集注釈書解題 三」による。

(21) 以下は写真版による。

(22) この伝受資料に関しては、小論「三条西家古今学沿革資料集攷―実隆・公条・実枝、(附)宮内庁書陵部蔵『実条公遺稿』(部分)翻刻―」(『埼玉大学紀要人文科学篇』34・昭60・11)の中でも簡単に触れたが、井上宗雄・柴田光彦氏「早稲田大学図書館蔵三条西家旧蔵文学書目録」(『国文学研究』32・昭40・12)、小高道子氏「東常縁の古今伝受―伝受形式の成立―」(『和歌文学研究』44・昭56・3)、柴田氏「荻野研究室収集三条西実隆の書状をめぐって」(『早稲田大学図書館紀要』22・23・昭58・8)などを参照。また、早稲田大学蔵資料影印叢書(汲古書院刊)に影印が収録される由である。

(23) なほ、末裔として所謂『為明抄』を加へるべきかもしれない。「内容は宗祇の説を中心としていて為明の注釈ではない(片桐洋一氏『和歌大辞典』)。中周子氏「京都大学図書館本古今為明抄の成立とその性格」(『和歌文学研究』45・昭57)及び片桐氏「中世古今集注釈書解題四」(『赤尾照文堂』昭59)などを参照。なほ従来知られてゐた伝本は、京都大学附属図書館中院文庫蔵「古今集為明抄」(中院・VI・四四、宝永3年藤原基定写)のみであつたが、同じ中院文庫に蔵される「為明抄」(中院・VI・一〇一、寛永9年写?)も実は『為明抄』で、しかも奥書などから、「古今集為明抄」の親本と推定される。この新出本により注を抄すれば、「題しらすは、時に望てよめる哥也」(三番歌詞書注)とある。

(24) この古注に関しては、小論「周辺の宗祇説・統紹―『兩度聞書』疏余滴―」(『藝文東海』4・昭59・12)参照。

(25) 注(7)に同じ。

(26) この古注に関しては、前掲小論「三条西家古今学沿革資料集攷」の中で簡単に考証した。『伝心抄』の影響下にある中院家の(?)注である。

(27) 江戸初期写。3冊本。系統・成立ともに不明だが、宗祇流古注の影響を色濃く受けてゐる。